

# 續 華山の肖像畫

菅 沼 貞 三

華山の筆になる肖像畫について、嘗て私は本誌第十八號に當時親しく品鑑した諸作品を蒐めて、その概要を記して置いた。その後しばらくして馬琴の一子琴嶺像について調査の機を得、その小文を本誌第八十三號に收めることによつて、華山の描いた肖像畫の現存作品についての紹介は、杜撰ながらも一段落ついたものとひそかに考へてゐた。然るにその後わが美術研究所に於て、華山作品の全般に互る調査がすゝめられて、未見の肖像畫及びその稿本やスケッチ類が、尙一二ならず遺存してゐることを知るに至つた。

今回は等の遺品について、大凡の調べがついたので、その品目を正本・稿本・スケッチ類の順に羅列し小解を附して、嚮の拙稿の補遺にあてたいと思ふ。

正 本	一 伊藤鹿鳴像	兵庫	伊藤 泰氏保管
稿 本	二 立原翠軒像	濱松	大谷喜太郎氏藏
	三 大原道齋像	東京	秋草重三郎氏藏
	四 某武士像		美術研究所保管

スケッチ類

五 某町人像	壬午 圖稿	濱松	高林泰虎氏藏
六 羽田野蘆谷像	壬辰 客坐掌記	同	
七 十寸見藤八像	戊戌 天保掌記	豊橋	浅井岩次氏藏
八 生田萬像	毛武 遊記	同	
九 田村金兵衛母親像	右同	同	
一〇 ぬい女像	右同	同	

## 一 伊藤鹿鳴像

紙本着色 挂幅装 竪一〇五釐 横三六・四釐(第五・九圖)

鹿鳴名は孔昭字は是則、又の名を維恭といひ、鹿鳴はその號である。出羽の莊内松山藩の御用魚商の家に生れ、夙に讀書を好んで家業の少暇を惜んでこれを行つた。殊に漢籍に親しみ終に醫を志して江戸に上つて桃井桃庵の門に入つた。日夜黽勉の功を積んで、桃庵門下の駿足と謳はれるに至つた。學成つて莊内にかへり、酒田に於て醫を業とし、投劑よろしきを得たので、その地方に名を馳せた。かたはら鹿鳴塾を開いて、門生に醫學を講じ、後には藩醫に登用された。かくして晩年中風にかゝり文化十三年七月歿した。享壽は詳でないが、鶴岡の歌人池田玄齋の弘

采録に「維恭は予が逢ひし頃六十に近き翁」と記してゐる。同記は玄齋退隱の文化初年頃の著録であるから、鹿鳴歿年の齡は七十を越してゐたものと推せられる。

本像はその畫上の題に「鹿鳴伊藤先生畫像」と大書し、その側に「孝子馨謹題」と書いて、白文方印「伊藤馨印」と朱文方印「伊子德氏」の二顆があり、關防に白文方印「鳳山」が捺してある。題書の筆者馨は鹿鳴の次子で、字は子德初め郷太郎後に大三郎と稱した伊藤鳳山その人である。文化三年出羽の莊内酒田に生れ、文政三年始めて江戸に笈を負うて、朝川善庵について儒學を修めた。學成つて天保元年二十五歳の時に田原藩主三宅侯に聘せられて書を講じた。

また本像の畫中に「天保甲午八月十有二日」の年記と「邊靜寫」の款記の下に、朱文方廓印「渡邊登印」が鈴せられてゐる。甲午は即ち天保五年に當り、像主鹿鳴の歿後十八年を経て居り、畫者華山四十五歳の筆作にかゝるものである。本像はその製成に當り、一日鳳山が華山に對して、父維恭像の作成を依頼したところ、華山は面識もない人の肖像は如何にせん描寫しがたいと辭退した。鳳山は更に懇望して、血縁上必ず亡父に相似するものがあらうから、鳳山自身の像容を寫し之を骨子として作畫することを慫慂した。そこで華山は當時二十九歳の鳳山の姿態からその父維恭の幻影像を作り上げたものといはれてゐる。

本像についてみるに、剃髪した頭は淡墨、小皺がよつて頬の落ちた老顔も、瘦せて骨格の顯はな胸も、膝におく手もすべて肉身は淡褐色を彩し、これに極くわづかに淡墨の隈を施してゐる。そして著衣は淡黄色で淡藍色の帶に腰刀を差し、唐草の大形地紋をもつた黒の羽織を着て正座

してゐる。書冊を懷にして、襟の開いたさまや、膝に伸した左手も、無雜作に自然の姿に描かれてゐる。殊に對者をさぐるやうに眇目をした目つきが、いかにも經驗の深い老醫の風采をさながらに寫し得てゐる。若い鳳山の姿を寫し、それを骨子として、このやうな老醫の特徴を捉へて描出するなど、肖像畫家華山の非凡な手腕がうかがはれる。

華山と鳳山との交道が始つたのは、鳳山が田原藩に聘せられた天保元年前後のこと、思はれる。その推挽には華山が預つて力あつたと云ふ。また後年鳳山が藩地に住し、成章館の講師に任用されたのも亦華山の推奨と眷顧によるものであることが、華山の眞木定前へ送つた書簡數通の隨處に見られる。今その中から鳳山に關する二三の記事を摘出してみると「大三郎賓師優待隨分敬し候而成章館へ客間を建て置くべし」とか「大三郎も此方より育ひ不申候而は眞儒になり不申可憐男也」とか「大三郎古書を読み、經を解く處教て不倦所皆取るべく候唯大疵と申は道と行とを斷然と別に仕己に克つこと毫分も出來不申實に玉益の底無きが如くに御座候」とか「大三郎事歸邑の後如何に御座候哉種々被仰越候へ共固大學者之事私式の御撫可仕人には無之唯歸邑の上の處案事られ申候君子は御治め可被成候小人は御收め可被成候さなくては大三郎の功立不申候」などと書いてゐる。是等を讀めばわかるように、鳳山の起居の間に眞儒にふさはしくない行爲があつたものらしく、これを華山はあくまで庇ひ、その長所を稱揚して優待方を、當時同藩の文武取立總掛の眞木定前に勸請してゐるのである。

その後華山が己亥の厄に遭ひ在所蟄居を命ぜられ、田原に幽居した時鳳山はしばしば訪ね來つて慰藉したことが、華山の守困日曆

本號第百中  
七號所收

に見えてゐる。當時鈴木春山も田原に在住してゐて、後の世の人々が「田原には過ぎたる山が三つある」と貴んでゐるが、その當時の語り草として「田原にはいらざる山が三つある。華山、春山、伊藤鳳山」と呼んでゐたと云ふ。晩年世に容れられなかつた華山が、杞憂によつて自刃した時鳳山は京師にゐた。その悲報に接して「聞渡邊華山見獄囚。既免而後自刃死賦一絶哭之。有引國家之所諱令闕之」と題して「平日不論求名利獄囚乃死渾依義 君心裡回佛前花 帶雨難乾憂國淚」と一首を賦してゐる。

以上記すところによつて華山と鳳山との交友の一端は窺ひ知ることが出来たと思ふ。その鳳山のためにその父鹿鳴像を一種の想像で描き與へたのも、兩者相互の情誼の深きを想へば、決して偶然の事ではない。

## 二 立原翠軒像

紙本着色 挂幅装 七四・四種 横四三・六種(第九圖)

縹の拙稿「華山の肖像畫」中に於て、私は翠軒像の正本が關東大震災の時鳥有に歸し、その面貌を中心とする胸像の稿本が、小室翠雲氏の所藏にかゝることを記したが、今回その正本に近似の半身像稿本に接することが出来た。

ついて視るに、顔面は俗緒を薄くかけその上に、同色と淡墨とをまじへた隈を施してゐる。頭髮や眉の毛描は淡墨の平ぬりの上に、焦墨で細寫し、鬢髪の白毛はぬり残しによつて現はしてゐる。額の皺、目もとの窪み、頬の落ちて頤鬚のまばらに生じたところなど、すべて仔細に觀察してゐる。とりわけ炯々として人を射る眼光と隆鼻と堅く閉した口唇など、意志強き老儒に親しく面接する感がある。而して著衣や懷中の書冊

脇差などの表現は、淡焦の墨色に速筆を馳せて、輪廓の大意を擲んでゐる。

紙は八紙繼になり顔面の部分は別紙を貼付し、推敲の跡歴然としてゐる。試みに本稿を焼失した正本と比較するに、その面貌及び體容は大凡相似して居り、その筆致もまた軌を一にしてゐるが、本稿に於ては腰に太刀を佩びてゐる。またこれを小室氏藏の稿本と比較するに、本稿が正本に相似し、その形體の整備してゐるに對し、小室氏本は未完の個處が目につく。但し小室氏本の筆致が自在で含蓄に富み、その畫致の秀れてゐる點は、本稿の及ぶところではない。思ふに小室氏本は直接に對看し寫生した稿であり、本稿はそれを骨子とし修正補筆になるためであらうか。その畫致はむしろ正本に庶幾いものがある。

華山がその師儒の像を成すに當つて數本もしくは十數種の草稿を重ねて、その完璧を期したことは、縹の拙稿中の一齋、慊堂、米庵の諸像について説いたのであるが、今回この翠軒像稿本に接し得て、また一つの證左を加へることが出来た。而も正本には無い佩刀が本稿に見られるは本稿の上に更に、正本に近づく圖稿が存在してゐたことが考へられる。

尙本稿の製作期については、前稿に記した如く、翠軒歿年の文政六年前後、華山と杏所との交友が既に結ばれてゐた頃が推定される。

## 三 大原道齋像

紙本着色 挂幅装 堅七三・五種 横四八種(第一〇圖)

本像は見らるゝ如く剃髮し、眉目の大にすぎる稍ゝいかつい容貌に、當時の醫師の常用する被風をまとうた半身像である。面部その他の肉身は淡黄色に淡俗緒の陰影を施してゐる。頭部はかすかに淡墨をかけ目に

胡粉を入れ、脣に朱と臘脂を點じてゐる。襟は胡粉、著衣は草汁、被風は淡墨まじりの赤紫色で、胸もとの總は俗赭色、鈕は淡藍に胡粉を混じてその光澤を表はしてゐる。殊に面貌の輪廓に細筆を用ひ、柔味のあるかすれた線描とを併用して、まるで木炭畫にみるやうな、自在な筆致がうかゞはれると同時に、目もとや鼻側脣邊の限取に於て立體感をとらへるに、洋畫の手法

が巧みに應用されてゐる。而して著衣や被風の輪廓線は南畫手法の太目の強い筆致に終始してゐる。本圖、稿本ながら崋山肖像畫法の特徴が細部に互つてよく看取されるのである。

全圖八紙繼になり、特に面部のみ

別紙を貼付し修正を重ねてゐる。尙圖中に「大原道齋小照 全樂堂稿本 天保丁酉四月」と墨書し、その側に朱文重廓方印「全樂堂印」が捺してある。年記の丁酉は天保八年のこと、同年四月二日に道齋は四十八歳で逝去してゐる。昌谷頌の撰するところの「大原道齋墓碣銘」によれば、道齋は寛政二年に生れ、本姓は土肥氏で諱を照觀と云ひ、道齋はその號

崋山筆野田羽谷盛像 (客坐掌記より) 愛知 淺井岩次氏藏

である。醫學に志し勉精しつゝ、諸國遍歴をして後、文政五年江戸に居をトして醫を業とした。會々明石藩醫の大原松庵の歿後嗣がなく、道齋は望まれてその後を繼承して、大原氏を冒すに至つた。その後麴町に居住し、また長崎に遊ぶこと一年、益々醫學を攻究し、江戸に還つて治療に當り名醫の譽を得たと云ふ。

道齋と崋山との交道については崋山の日記全樂堂日録の天保二年四月二日の條に「夜訪道齋借觀二十四家文集」の記事をはじめ同日録中の隨處に見出され、その交友の程がしのばれる。本稿の成つたのは畫中の年記が示すごとく恰も道齋逝去の歲月である。これを見れば崋山が父巴洲の遺照を寫したことや、琴嶺の遺肖を作つたことと同様に全樂堂記傳に見る「人ノ爲ニ親又ハ子ノ遺肖ヲ描キテ其哀ヲ慰シコト多シ」とある如く崋山は道齋の嗣の爲に遺照の草稿をいそいだものと想像される。然し本像の生氣に富む風丰を見れば、琴嶺像の如く特殊な描法によつて畫かれたものでなく、生前の寫生を基礎として描出したものと推せられる。

尙田原蟄居中に崋山が椿山に與へた書簡「繪事御返事」の中に「大原氏像承知候得共右次第にて未其儘に致置候」とある。同書簡は天保十一年十月下旬に認められたものと考へられるところから、その後、於て道齋像の正本或は作られたかも知れないが、今いづくに存するか詳かでない。因に本像の影本は既に本誌第九十二號に於て谷信一氏の「豐太閣畫像論」中、刷筆を用ひぬ畫像の參考として收載したが、挿圖の上下左右が切斷されてゐるため、こゝに重複をいとはずその全圖を掲載しておいた。尙また森銑三氏がその著「渡邊崋山」に於て全樂堂日録の解説中に本像の上に觸れてゐる。



#### 四 某武士像

紙本着色 挂幅装 竪六二種 横四九・七種(第四圖)

紋付の著衣に上下を著け脇差を佩びた中年の武士が、火鉢に倚つて端坐してゐる。角火鉢の縁に兩手を置き、左掌を火に翳し右掌に煙管を持ちながら、身をやゝ前こぶみにして、恰も畫外の人物と親しく對談してゐるかのやうに見られる。

淡焦の墨描を主體として、顔面は淡俗赭に胡粉を薄くぬり、また淡墨をもて限取をし、唇に淡朱をおいてゐる。眉毛の太く唇の厚い頤の張つた相貌にはいかにも一徹な武士の氣性があらはれてゐる。草の汁色の上下と黒の著衣に「下り藤」の紋所がついてゐる。

襟と袖口は淡藍色袴は俗赭に褐色の縞目を入れてゐる。煙管と刀の鞘は雌黄で、刀の柄頭は藍をもつて彩してゐる。而して本圖中に款記を伴はないが、その迫眞の姿に透徹した畫致を有する點に於て、畢山の筆作と斷定して差支ないと思ふ。

また畫中に「佐藤云眉ヨリ上不似」とあり、その下に「四萬俵一人貳合黒米三合」と云ふ留書がしてある。而してその下部に「丁酉二月稿十五日也」と墨書されてゐる。この書體はまさに畢山の筆端にかゝるものと首肯される。

本像もとより誰人の影像か未詳であるが、上記の年記その他の留書によつて、左記の要項が想定される。乃ち丁酉とあるは、天保八年畢山四十五歳の時に相當し、二月稿云々とあるは云ふまでもなく、本稿の成つ

た月日を示すものであらう。

全樂堂記傳の記すところによれば、天保八年は前年の天災凶作の後をうけて、庶民が飢に悩んだ時である。この八年の春、恰も田原藩主は在國中で非常に憂慮され、江戸詰の畢山を招致して、救荒の事に當らせやうとした。しかし當時畢山は病臥のため、召に應づることが出來ず、ただ「凶荒心得書」を草して、用人眞木定前を代理として藩地に赴かしめたと云ふ。

畢山筆十寸見藤八像(客坐掌記より)

愛知 淺井岩次氏藏

本稿の成つたのは丁度その當時である。されば畫中の留書に「四萬俵」云々とあるは、畢山が庶民へ施米の量をこゝろに置いて、本像の筆をすゝめてゐたのではなからうか。また「佐藤」云々の留書に、姓名を呼捨にするからには、心易立の人名が想起される。畢山の師表の一齋や信淵をさして云ふのではなからう。當時畢山の同藩中に、佐藤信當、通稱半助と稱するものが居つた。前記の凶荒心得

書の末尾に「半助殿著にて筆を止む」と書添えてゐることから推定して本像留書の佐藤と呼ぶものは、どうやら信當即ち半助のことではないかと考へる。

畢山と半助とは互に藩務を扶け合つたのみでなく、その友好の深いものがあつた。ことに畢山は半助のために、その父信全の肖像を描いてゐる。嚮の拙稿、「畢山の肖像畫」中に収載した佐藤一空像は、即ちそれである。

同藩士佐藤半助の辱知のもので、而も天保の飢饉に際し、藩地救荒の事に關聯して想起されるのは、まづ第一に眞木重郎兵衛定前であらう。定前は藩公の召致に、崙山に代つて藩地に赴いたことは前記したごとくであるが、その救済のために寢食を忘れて盡粹した。その甲斐あつて、田原の領内では一人の餓死も出ず、當路から褒狀が與へられたと云ふ。その功績の陰には、先には報民倉設立を建白し、當時に於ては救荒の書を草した崙山の努力あることを忘却することは出来ない。尙また崙山の定前宛の書簡中に「半助様へも御見せ可被下候」などとあるをみても、崙山、半助、定前の三者間の親交疏ならざるものが窺知される。

崙山筆生田萬像(毛武游記より)

以上の事項から類推して、私は本稿の像主を眞木重郎兵衛定前ではなからうかと想定してみた。稿の成つた天保八年は定前四十一歳に相當し、本稿像姿の一見中年の武士なるは、年齢の上で必ずしも不合理とは思はれぬ。而も顔面に一徹な氣性の看知されるところが、定前の後年、藩主繼嗣の問題が起つた時、君命に對して死をもつて極諫したごとき、剛直一途の氣性の一致點が見出される。

然しながら定前の子孫で、現に豊橋市在住の眞木氏常用の紋所は「金打に下り藤」紋である。且また本像の面貌や容姿の生動のあらはれは、直接の寫生によらなければ到底描出出来ぬものである。この年二月中旬頃定前は君命を帯びて、藩地救荒に赴いてゐた。この二項の疑點が存す

る限り、本稿の像主をにはかに決定するは困難のこと、思はれる。

されど前記した如く定前は、藩主繼嗣の問題に一死をもつて極諫し、その忠節は幸に賢君康直公に容れられたので、家門の譽は永へに傳はるが、同時にまた眞木一門として、君公に對し憚り遠慮するところがあつたのではないか。そのために從來の家紋の「下り藤」を「金打に下り藤」と變更したのではなからうかと想像されるのである。

また本稿の見られるやうに精彩あるは、直接の對看寫照によらなくて愛知 淺井岩次氏藏

は、よくなし能はぬと思ふが、崙山の筆に成る他の諸肖像の作畫過程に於て、面貌を主とする寫生やまた半身像や全身像と數種の稿本が遺存してゐること、他に幾多の例證がある。本稿對看寫照を基礎としたものではあるが、必ずしも第一稿とは限らない。幾本目かの草稿として、遠く藩地に活躍する僚友をしのびつゝ、畫筆を驅使したとも見れば見られ得る。而も定前の藩地に

代行したのは、天保八年正月下旬の事で、同三月上旬には江戸に到着してゐる。されば定前の江戸出立の前後に、崙山のもとに伺候し、その對談の姿をそのまゝ描きとめたものを基礎とした本稿を作成したのかも知れない。若しもこのやうな想定が多少でも、蓋然性があるならば本稿につながる興味はまた一段とまざるものがあらう。

以上に於て私は今回調査した崙山の筆になる肖像畫中正本一點稿本三點について、その概要を記したのであるが、尙崙山の書いた日記類客坐

掌記其他の手記で、前稿に収録しなかつたものの中から肖像のスケッチを求めると左記の三點が數へられる。

五 某町人像（壬午圖稿 袋綴冊子 竪二三・三種 横一六・三種）

六 羽田野蘆谷像（天保壬辰客坐掌記 袋綴冊子 竪一九・七種 横一二・七種）

七 十寸見藤八像（天保戊戌客坐掌記 袋綴冊子 竪二〇・二種 横一二・七種）

## 五 某町人像（第一〇圖）

圖稿の壬午は文政五年崋山三十歳の

時である。本像はこの冊中に薄様の別

紙を二紙貼付した上に、綴目をさけて

横開きにし、淡彩色を施した町人風の

人物スケッチである。兩掌を膝におい

て正坐してゐる。圖中に何等の註記も

なく、たゞ羽織に五三桐と覺しい紋が

描かれてあるのみで何人の像か不明で

ある。面貌の輪廓に細線をもちひ、耳

のあたりや唇邊に淡墨の隈取をして、著衣の衣褶に自在な墨描をもつて

したところ、崋山特有の畫法がうかがはれる。

## 六 羽田野蘆谷像

現存してゐる崋山の客坐掌記の中、これは「天保壬辰」とある。即ち

天保三年崋山四十歳の手記である。この冊中に在る本像は武士風の人物

が琴を弾じてゐるさまを草々の筆を馳せて成れるもの、顔に淡俗赭、著

崋山筆田村金兵衛母親像（毛武游記より）

愛知 浅井岩次氏藏

衣に草の汁をごく薄く彩してゐる。そして圖中に「催馬樂むしろ田、中川侯羽田野蘆谷名重輝」と記してゐる。筆も色も簡約して描きながらも人物の舉止が巧みに寫されて、恰もむしろ田の樂譜が響き傳つてくるやうだ。田原藩地の近隣の吉田在、羽田の里に當時羽田野常陸と云ふ神官がゐた。平田篤胤の門に入り國學を修めその名遠近に傳つてゐたと云ふ。常陸名は榮木、その父は敬道と云ひ勤王の士であつた。本像の蘆谷

果して常陸の一門であるや否や今これを詳になし得ない。江湖識者の示教を得たいと思ふ。

## 七 十寸見藤八像

本像所載の客坐掌記は天保戊戌の年記がある。即ち天保九年崋山四十六歳の筆にかゝる手記である。圖中の留書に「十寸見藤八一中ふしをかたる三味せんはんばのおとなといふ女なり」とある。當時江戸に在つて河東節をかたるものに、十寸見河東と云ふは有名であるが、本像の藤八はその一族のものか、その傳を詳にしない。はんばのおとなといふ女のことわからない。たゞ折にふれ、市井の一中節に耳傾けた或日の崋山の上がしのばれるのである。圖は顔面などの肉身に黄まじりの淡俗赭をかけ、その上にうすく隈取を施し、唇に朱をおいてゐる。殊に薄様の紙質の上に、髪や著衣の潤墨の筆致が鮮かで、この片々たるスケッチの中にも、崋山特有の畫致がうかがはれる。

八 生 田 萬 像 毛武游記 袋綴冊子 竪一八・二種 横一二・三種

九 田村金兵衛母親像 同

二 ぬ い 女 像 同

毛武游記は崋山が高木梧庵と家僕彌助を伴つて上毛の桐生や足利に遊んだ時の旅行記である。現存の冊子の表紙に上冊と記してゐるが、是につづく冊子の遺存を聞かぬ。即ちこの上冊には天保二年十月十一日江戸を出發してから桐生滞留の同月二十八日まで行程が記してあつて、この中に途上のスケッチが十數圖收められてゐる。こゝに所掲のものはその中から撰んだ肖像のスケッチ類である。

崋山筆ぬい女像(毛武游記より)

## 八 生田萬像

毛武游記の紀行を讀んでゆくと天保三年十月十一日江戸を出立した、崋山の一行は雨のそぼふる中を板橋を経て、志村の里に出た。そこから蕨驛に至る道中で煙草の火を借りようとして、先行く人に追付て話かけた。この人が生田萬であつた。「こは惣髪といふ頭にて、眉もうすく鼻すじ通り、面長く色黒くかたに包みを負たるもの、ふなり。身のたけは予にひとしく大きやかなる男」と記してゐる。本圖は全くこの記事通りの風采をした男の顔が素描されてゐる。簡潔な筆致をもつてして、威嚴と品格を有する顔容がまぎ／＼と表現されてゐるのは遺である。生田萬名は國秀ま

續 崋山の肖像畫

た道滿ともいひ、萬はその通稱である。平田篤胤の門に學び、その高足であつた。上州館林侯の家臣であつたが、故あつて仕をいたし後江戸に住してゐた。この時は上州太田に行く途中であつた。崋山の一行とつれ立つて蕨驛をすぎ浦和の驛まで快談しつゝきた。崋山はさきをいそぎ萬の同行を求めたが、萬はつかれたといつて此の驛にやどり袂別した。その後萬はいつまで太田に滞在してゐたのであらう。彼の小傳を讀むと天保七年越後に遊び、柏崎に留つて神道を講じてゐたが、同年の飢饉に際し窮民救恤のため柏崎陣屋を襲つて吏を斬つて死したとある。本圖は劍難の萬とやがてまた自刃し果てる崋山とが、上州街道の途上でゆくりなくも邂逅した記念の像として劇的の興味さへ湧いてくる。

愛知 浅井岩次氏藏

## 九 田村金兵衛母親像

十月十七日晴、田村金兵衛を問ふとある游記の記事によれば、金兵衛の母親は「いとすやかなる嫗にて今年八十餘」とあり又「色あかくつやよし目明かに眼鏡を不用髪黒くこしまがらず神氣甚しまりよし」とある。また游記にはこの嫗の七十八歳の時からおのが子のお梶と云ふに、文字を問ひ手習をして、六七年になり今も夜習ふことをやめず丑みつ頃までも寝ないと云ふことだ。またこの嫗は不思議なことに今春前の齒が二本生えてきたなども記してゐる。本圖も亦草々たる簡約の素描になりながら髪も黒くつや／＼した嫗の息災な顔

が巧みに寫されてゐる。

## 一〇 めい女像

毛武游記の「十月廿一日晴津久井氏を問ふ」と云ふ記事のうちに、ぬいは津久井松宅の忘れがたみで、ことしの三月足利の呉服屋近江屋忠四郎にもらはれて、その子と婚約の身で歳は十四である。「そのさまいと優に女びて又おさなきふるまひも打まじりていとめでたし」と書いてゐる。本圖は髪に簪をさし、兩手を膝において、端坐する娘姿をうつしたもので、衣物はうす墨で縞目を描き、袖口に褐色、裾裏に淡草汁色を彩り、水色の帶をしめてゐる。そして目もとと唇に淡く俗緒をおいてや、うつむきの愛くるしい顔をうつしてゐる。胸もとがやゝはだけ裾裏を見せて坐したところが女びてゐて、兩手を膝においてかしこまつたところがいかに稚拙なふるまひで、娘らしいうひうひさが手にとるやうに寫されてゐる。この様なスケッチ類にも畫家としての崋山の面目が躍如として、觀るものの心をうつ。

以上列記の諸作について説くところは前稿「崋山の肖像畫」の補遺ともいふべきもので、而も正本と云つてもいはゞ想像で描いた作品であり、他は稿本とスケッチ類のみである。その製成の時期は文政五年から天保九年に亘つてゐて、崋山の年齢からすれば、三十歳から四十六歳に至る壯年時代に相當する。前稿中の主要作品も亦この時期に於て製作されたものであつて、崋山が作畫過程の初期に於て文晁其他から學んだ從來の畫法の中に、洋畫手法を攝取して、對看寫照の肖像畫を作成し始めたの

は、彼が蘭學に志したと同時期の三十歳前後の頃であつた。而して彼が作畫研鑽の果に南畫手法と洋畫手法とを併用して、精彩に富む肖像畫法を完成したのは四十六歳前後の頃が考定される。

こゝに列記した諸作品は、崋山の畫いた肖像畫として、前稿に説いたものに匹儔するやうな主要作品とは云へないが、それが主として稿本及びスケッチ類であるだけに、肖像畫法の道程が手にとるやうに窺はれると共に、對看寫照の妙趣があらさまに看得されて、こゝにも亦興味深いものがあると私どもは考へてゐる。而して前記した如く本誌第九十二號所收の道齋像と、昨秋恩賜京都博物館に開かれた日本近世名畫展覽會に出陳され、同圖錄に收載されてゐる翠軒像をのぞいて、他の諸作品の影本はすべて、學界に未紹介のもののみである。(昭和十六年六月十日)

(一) 華山筆 伊藤鹿鳴像

兵庫 伊藤 春氏保管

(二) 華山筆 立原翠軒像 稿本

静岡 大谷喜太郎氏藏



(一)

華山筆  
大原道齋像

東京 秋草重三郎氏藏

(二)

華山筆  
某町人像

静岡 高林泰虎氏藏